手を伸ばしたのなら～connected　heart

東雲咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
手を伸ばしたのなら～ｃｏｎｎｅｃｔｅｄ　ｈｅａｒｔ

【Ｎコード】
Ｎ５４３２Ｉ

【作者名】
東雲咲夜

【あらすじ】
捨てられてしまった不幸な少女と、口の利けない哀れな青年。
二人が出会ったのは、冷たい雪の冬夕暮れで。
独りと独りが出会って、二人暮らしへと変化していく。
そんな、少女と青年のお話。

手を差し伸べて、握ってくれる誰かがいるのなら。
伸ばした手は決して無駄にはならないから。

出会いの雪暮れ（前書き）

それでは、二人のお話をご覧くださいませ。

出会いの雪暮れ

差し伸べられた手を取ったのは、凍える雪の日だった――

それは鈍色の空から、冷たい欠片が降り注ぐ日。

普段は行きかう人で溢れているオフィス街だが、天候のせいか人影はまばらだった。

夕暮れ時という時間帯も関係していたのかもしれない。

仕事を終えた人々は、厭わしそうに空を見上げては、家路へと向かう。

その様子を、路地裏から眺めている一人の少女がいた。

身体には色褪せたぼろぼろの古着を身に纏い、膝を抱えて座っていた。地面に触れる白い足は素足。

くすんだブロンドの髪には、雪が薄く降り積もっていた。

表通りを眺めている翡翠色の瞳は、冷め切っていた。

鈍色の空を見上げながら、少女は考えていた。

今日は……この後どうしよう。このまま此処にいると、凍えてしまう。

けれど他に夜を過ごせそうな場所もないわ。

空き家に潜り込もうにも、最近は鍵が掛かっていたりすることが増えて、難しい。

店の軒下で過ごそうと試みたこともあったけれど、店員に水をかけられた。

びしょ濡れになって、寒くて風邪をひきそうになってしまった。

ぐるぐるとしばらく少女は考えてから、ためいきをついた。

外の寒さと比例しているかのように、思考がうまくまとまらなかった。

身体を丸めることでかろうじて暖を取っているから、動くと冷え

切ってしまうし……

それに、行くあてもないし、今夜はこのままでいよう。

そう決めた少女は、もぞもぞと動いて、ぼろ布を身体に強く巻きつけた。

朝起きると、誰の仕業かはわからないが、盗まれていることがあったから。

そのまま少女は、うとうとと瞼を閉じ始めた。

徐々に下がっていく気温に身震いしながら、夢の中へと行こうとする。

楽しくも、悲しくも、寒くも暖かくもない夢の中へ。

身よりもなく、帰るべき場所もない少女にとっては、つかの間の安息の時間。

静かに雪が降り積もり、少女の瞼が完全に閉じてから、数秒後。

眠ったはずの少女が、ぱちりと瞼を開いた。

少し寝ぼけた目をしながら、きょろきょろと辺りを見回す。

……誰か来るなんて、珍しいわ。ここにはあまり人は近寄ってこないのに。

場所を変えた方がいいかな……？

少女が迷っている間にも、靴音はどんどんと近づいてきていた。

すぐ近くて靴音は止まり、少女は音のした方へと首を巡らせた。

少女の近くに立っていたのは、一人の青年だった。

黒い外套を身に着けて、少女の方をじっと見ていた。

薄茶色の髪には少女と同じように、雪が薄く積もっていた。少女を見る目の色も薄かった。

青年を見て少女は、変な人だと思った。

どうしてわたしの方を見ているのだろう。浮浪者にしては身なりがしっかりしているし。

普通の人は、あまり路地裏には来ないのに。

見られて居心地の悪い少女は、青年に問う。

「……何か、用？」

青年の唇が僅かに動いたがそれだけで、答えは返ってこない。
「用がないのなら、何処かへいってちょうだい」
拒絶の意味を込めて睨みつけてみても、青年はそこに佇むだけだった。
意味がないとわかって、少女は青年から目をそらした。
まったく変な人。天気も悪いのだから、早く帰ればいいのに。落ち着かないわ。
少女の視界には、青年の影が見えた。俯きながら、その影に向かって心の中でぼやく。
今日は厄日だわ。おちおち眠ることもできないなんて、ついてない。
眠るべきか、場所を移動するか。少女が考えようとした時、影が動いた。
いなくなったのかと思い顔を上げて、少女は驚いて大きな目を見開いた。
さきほどまで佇んでいた青年が、少女に向かって手を差し伸べていたからだ。
「なに……馬鹿にしてるの？　からかってるの？　何とか言ったらどうなのよ」
相変わらずの無言だったが、青年の唇が動いたのを少女は見逃さなかった。
ゆっくりとした唇の言葉を読み取った少女は、馬鹿みたい、と小さく呟いた。
本当にあの男は変な人だわ。
だって、一緒に来る？　なんてわたしに言うんだもの、おかしいに決まってるわ。
こんな路地裏で生活してるような子供を拾って、何が楽しいのかしら。
今の時代、売り飛ばされはしないだろうけど、殺される可能性は十分にあるわ。

そんな誘いに乗ってしまうほど、落ちぶれてはいないわ。
ひとしきり考えてから少女は、眠ってしまおうとした。
目の前で変わらずに手を差し伸べている青年のことなど、見ない振りをして。
それでも気になるのか、少女はちらちらと青年を盗み見る。
いつまでいるのかしら……うっとおしいわ。雪だって降っているのに。
そうよ、外套にだってどんどん雪が降り積もっているじゃない。
少女の身体と同じように青年にも雪が降り積もっていた。
寒くないのかしら……と思いながら、少女は身震いをした。
随分と、寒くなってきたわ。気が付いたらもうすぐ夜ね。お腹も空いてきたな。
昼間に残飯を漁ったきり、少女は何も口にしていなかった。
ちゃんと夜眠れるかしら。凍死してたりしないかしら。
寒さに凍えながら、ぐるぐると少女は考える。その合間に、ちらと青年を見る。
薄く微笑んだまま、青年は少女を見ながら首を傾げている。
伸ばされた手は、少女の方を向いている。
この人についていけば、どうにかなるかしら?
そんな考えが、少女の中で首をもたげた。
ちゃんと家はあるでしょうし、きっと外よりは寒くはないわ。
連れて行くかと聞いたのだから、その辺に捨てられたりはしないはず。
捨てられても、それまでは生きていられるわ。凍えて夜を過ごすよりは、安全……よね?
ちぐはぐな事を言っていると思いながらも、少女は一人頷く。
どこへいっても、わたしが独りなのは同じ。
自分で自分を説得した少女は、汚れを払いながら立ち上がり――
青年の手を取った。
「これで、いいんでしょう?」

問いかけた青年から返ってきたのは、さきほどよりもはっきりとした笑みだけ。

ほんの少し不安を抱えながらも、歩き出した青年に手を繋がれて少女は歩いていく。

繋がれた手は、外にいたにも関わらず暖かかった。

生きるために、少女は差し伸べられた手を取った。

氷雨の冬の日

少女と青年が出会ってから数日の事。
冷たい、冷たい雨が降り注いでいる日のこと。
青年の家の中で、少女は暖かい飲み物を飲んでいた。
座るソファーはふかふかとしていて、冷たい地面とは比べようがない。
向かいにあるもう一つのソファーに座る青年は、少女の方を向きやわらかく微笑んでいる。
時折、唇の動きだけで、「寒くない？」と尋ねている。
首を横に振りながら、少女はココアを飲む。
ストーブで暖められた室内は、心地よい温度で快適だった。
二人が出会ってから数日しか経っていないけれど、いくつか少女にはわかったことがあった。
青年が、喋れないということ。今まで、ずっと独りで暮らしてきたということ。
わたしを拾った、変な彼。
彼はあの雪の日、一言もしゃべらなかった。無口な人なのかと思っていたの。
だから、わたしは尋ねたの。どうして喋らないのかって。
そうしたら、返事をする代わりに紙に何か書いてわたしに見せたの。

『僕はね、喋ることができないんだよ』

さらさらと書かれた綺麗な字だけど、言葉は悲しいものだった。
それを見て、わたしは固まってしまったわ。それに恥ずかしくなった。

喋ることの出来ない人に無口だなんて、とても失礼なことよね？だから慌ててわたしは謝った。でも彼は、少しだけ悲しそうに微笑むだけだった。

その後にしてくれた話では、幼いころに病気にかかり、その後遺症らしい。

それ以来少女は、なるべく青年の唇の動きを読んで、会話をしようと努力していた。

簡単にはできないことだが、一生懸命に努力をしていた。

長い言葉や用件などは、青年が紙に書いて答えた。少女が紙を使って尋ねることもあった。

声のない会話だったが、なんら不都合はなかった。

少女から尋ねることが多かったのもあるのかもしれない。

いつのまにか青年を見ていた少女は、我に返ってコップを置いた。向かいでは、青年が不思議そうに首をかしげている。

何でもないというと、不思議そうにしながらも彼は笑った。

青年は、本当によく笑う。ハンデなど気にしていないかのように、くるくると表情はよく変わる。

目は口ほどにものをいうというけれど、この青年の場合はまさにそれ。

視線だけで、何となく何が言いたいのか、少女でも理解できてしまうほどに。

そんな眩しい笑顔を見て、少女はどこか後ろめたく感じていた。

ココアを飲み干し、コップをもって台所へと向かい、食器洗いを始めた。

食器はお昼分しか溜まっていなかったが、こまめに洗うのが好きなのだろう。

少女の動きを目で追った後、青年は本棚から数冊の本を取り出し読み始めた。

手早く食器を洗って水気をふき取ると、少女は棚へとしまいに行

く。

しまいながら、棚の中を眺める。

並んでいる食器の数は少なく、どれも使い込まれたように見えた。

その食器のよこには、真新しい食器がいくつか並んでいた。

本当に独り暮らしをしていたのだな、と少女は思った。

まさか、新しいものを買いにいくなんて思ってもいなかったわ。

わたしを連れてきたと思ったら、洋服や食器を買いに連れて行かれたんだもの。

彼いわく、必要最低限のものしか家にないから、らしい。

洋服はわかるけれど、食器までというのはわからない。

そんなに極端に少なそうには見えないのだけれど？

不思議の思いながらも少女は食器をしまい、棚を閉めた。

新品の方がいいでしょう？　というのが青年の言い分だったのだけれど。

少女はソファーへと戻りながら、次に何をしようかと考えていた。

洗濯物は……朝のうちに干しておいたし、まだ晩御飯の支度は早いわよね。

特に外にでる必要はないし――

基本的に、家事全般は二人で分担して行っていた。

少女はほとんど初経験のものばかりだったが飲み込みが早いのか、どんどんと上達していった。

最初の頃は、青年の分も洗濯などをしていたのだが……

『いつもどうり、普通にしててていいよ。あまり気を遣わないで？』

そう言われてしまったので、それ以来は自分の分だけにするようにしている。

掃除や、食器洗いなどは別なのだけれど。

それを聞いたときに少女は、とても意外に思った。

いつのまにか自分を拾った青年に対して、気を遣っていたから。

正確には、哀れんでいたというのが正しいかもしれない。

驚きながらも、割り切ろうとした少女はたくましいのだろう。

少し前の自分も、同情されることは嫌いだったから、わかるのかもしれない。

すぐに少女は出会ったときのような調子に戻った。

そんな少女を見て、青年が密かに苦笑いしていたことを彼女は知らない。

つらつらと考え事をしている少女に、青年がすいと紙を差し出した。

『今日の夜は、何か食べたいものはある？』

ようするに、青年が少女に聞いているのは晩御飯のリクエスト。

それを見て、少女は何にしようかと考える。

彼……とっても料理が上手なのよね。わたしとしては、ちょっと気に食わないわ。

ここに来たとき、ありあわせのもので作ってくれたけれど、とても美味しかったもの。

少女が空腹だったからだけではなく、青年の腕も関係していることは確か。

暖かいものがいいな……と思いながら少女がリクエストした料理は。

「えっと、オムライスが……いいわ。で、でも、わたしの分はちゃんと自分で作るからね」

子供の好きな料理の定番、オムライスだった。

青年は立ち上がると、冷蔵庫を開けて何事か確認すると、またすぐに戻ってきて頷いた。

どうやら、調理に必要な食材は十分に足りていたらしい。

『頑張ってね、少し難しいけれど』

「平気よ。あなたほど上手くはできないでしょうけれど……たぶん、大丈夫よ」

薄く笑うと青年は、再び読書へと集中していった。

しばらくはぼんやりとしていた少女だが、やがて自室へと歩いていった。

振り返らずに歩いていったので、少女は見なかった。
途中で青年が、もう一度冷蔵庫の中身を確認しにいったことを。
青年は料理手順を思い出しながらも、考えていたのだった。
洗い物や掃除はやっているのを見て、それなりに少女は上手らしい。
ただ、自分が料理している様子を物珍しそうに少女は眺めていた。
それが気になり、青年はもう一度材料を確認しにいったのだった。
この晩、青年の予感は的中してしまうこととなる――

『ええと……大丈夫だから、あんまり気にしないほうがいいよ』
青年がそう書いた紙を少女に渡したのは、夕食時、これから食事を始めようというとき。
二人の前にはリクエストどうりのオムライスが並べられていた。
青年の前には、ふわふわとした半熟の卵がとろりと乗っているオムライス。
少女の前には、少し硬めに焼きあがってしまった卵の乗ったオムライス。
ひっくり返すのに失敗したものか、所々形が崩れ、焦げた後がありすごいことになっている。
宣言したとおり、少女が自分の分を作った結果である。
「うぅ……こんなはずじゃあなかったのよ？　なんてこと……」
自分の作った料理を前にしながら、先ほどから少女はぶつぶつと呟いていた。
ああ。火加減がまずかったのかしら？　でも同じ火力で調理したはずだし。
あんなにひっくり返すのが難しいなんて。
柔らかいからまだ大丈夫と思っていたら、あっというまに火が通って――

焦げてしまった。
何度も頑張ったのに、さっぱり上手くならないなんて。
青年よりも料理が下手というよりも、すごい料理ができてしまったことが、少女にとってはショックだった。
少女を慰めようと頑張っている青年はこう思った。
今度は、小さくて軽いフライパンを買っておこうと。
彼には平気なものでも、少女には重すぎたようだ。ひっくり返すのにかなり手間取っていた。
戸惑う少女に気づいた青年が手伝ったものの、時既に遅しだった。
それだけなら……まだ、よかったかな。
そう思いながら青年は、台所のほうを見る。
数枚の皿にたくさん入っている——焼き卵。いや、卵焼き？
とにかく、オムライスに乗せられなかった卵が置かれていた。
そのまま止めるのかと思った少女が、何度かチャレンジした結果である。
どれも似たような結果になってしまい、卵だけが残ってしまった。
卵を買いに行かないと……と思いながらも、青年は少女に食事を勧める。
『そろそろ食べないと、冷めてしまうよ？』
少女は、じいっと、青年を見て、オムライスを見てから——スプーンですくって食べ始めた。
「どうせわたしのは、時間に関係なく硬いし、ぼそぼそしてるもの」
相変わらず何事かを呟いてはいたが。
苦笑しながらも、青年は自分のものを口に運ぶ。
ちなみに、二人の卵の下のチキンライスは青年が作ったものである。
卵は柔らかく、すくうとバターのいい香りが漂った。
一口食べてから、少女の方を見やる。
「火力かしら……腕かしら。いえ、そもそも——」
まだ何やらぶつぶつと言っている。それでも美味しいのか、スプ

ーンはせっせと動いていたが。
よっぽど悔しかったのだろうと青年は思って。
また一すくいしてから、青年は少女の肩を、とんとんと叩いた。
「……何？」
食べる手を止めて皿から顔を上げた少女の目の前に、スプーンが差し出された。
スプーンにのったご飯から漂うのは、いい香り。
びっくりして動きが止まった少女へと、青年は唇の動きで伝える。
『食べる？』
ぱちぱちと瞬きしてから、少女は素直に受け取って、食べた。
「悔しいけど――美味しいわね」
その言葉を聞いて、青年の顔が綻んだ。
屈託のない笑顔に恥ずかしくなったのか、少女はそのままスプーンを返すと、俯いてしまった。
耳が赤く染まっているのは、青年には見えているのかいないのか。

絶っ対に、上手になって見せるんだから……！
小さな決心をした少女だった。

後日、大量の卵焼きは青年の手によっていくつかのお菓子に利用されたのは、また別のお話。

桜吹雪の白昼夢

暖かい春の日差しが降り注ぐ桜並木。
柔らかく吹く風には微かな桜の香りがした。歩く少女と青年の前を花びらがひらひらと舞った。
木の間を歩く少女の顔は、年相応に明るいもので、輝いていた。
隣を歩く青年も、時折目を細めながらも桜を眺めている。
青年と少女は、家の近くにある桜並木へとお花見をしにきていた。
きっかけは、青年の何気ない一言だった。

『よかったら、お花見に行かないかい？』
「お花見……何で？」
自室から起きてきた少女に、青年はそう告げたのだ。少女はまだ少し寝ぼけていた。
その提案を聞いたとき、少女は何故花見に行くのかが不思議で仕方がなかった。
確かに桜は綺麗だけれど、わざわざ見に行くほどのものかしら？
それに、外は大勢の人がいて賑やか。賑やかすぎて、うっとおしいくらいに。
つまり少女は、そういった季節の行事には疎かったのだ。
一身上の都合もあるだろうが、普通の生活だったとしても、好んで行くようなタイプではないのだろう。
憮然とした顔をしている少女を見て、青年は聞いた。
『お花見、行ったことはあるかな？』
少女は少し考えてから、答えた。
「随分まえ。もっと小さい時だけれど、行ったことはあるわ」
母親と。

最後の言葉は口に出さずに、少女はそういった。
行ったことがないわけではないし、嫌な記憶でもない。
けれども、少女はやはり気乗りしないのであった。
『それじゃあ、やっぱり行ったほうがいいね』
青年がそういったのは、数分後だった。
一体、何でそういう結論になるのかと、少女は不思議で仕方がない。
あぁ……やっぱり彼は、何を考えているのかあまりわからないわ。
頭が痛くなりそうな少女を尻目に、青年はいそいそと台所で準備を始めていた。
どうやら、お弁当を持っていく気らしい。随分と本気のようだ。
小さなため息をついて何かを諦めた少女は、自分も手伝うべく台所へと近づくのだった。

そうして作られたお弁当を手に二人はお花見に来たのだった。
その包みは青年の手に持たれている。
少女が持つといったのだが、青年は転ぶと危ないからと却下したのだ。
隣を歩く少女は、すれ違う人々を見ながら言う。
「眺めている人はいるけれど……騒いでいる人はいないのね」
花見というと、とても騒がしいイメージがある。
あまり騒がしいのは苦手だから、そうじゃなくてよかったのだけれど。
見ている人は多いものの、宴会とか大騒ぎが始まりそうな気配は感じられなかった。
首を巡らせて桜を眺めながらも、何かに追われるようにして歩き去る人がほとんどだった。
いったい、どこでお花見をするというのだろう。
少女が首をかしげながらも歩いていると、視界にいくつかのベン

チが映った。
まさかと思っていると、青年はすたすたと歩いていき座ってしまった。
そのまま少女に向かっておいでおいでをした。……どうやら座れといいたいらしい。
それを見てゆっくりとした動きで少女はベンチへと歩いていき、青年の隣に座った。
「ベンチに座ってお花見するとは思わなかったわ……」
『地面に座らなくてもお花見はできるからね。前のときは、シートでも敷いてたの？』
「そうね、普通のお花見だったわ……って、わたしのことはどうでもいいじゃない」
顔を背けてしまう少女を見て、青年は微笑みながら紙を差し出した。
『それじゃあ、見ながら食べようか？』
青年の手が包みを開けるのを見ながら少女は思った。
なんだかこの人は、いっつも笑ってばかり。おっとりしているというか、天然というか。
よくいえば、マイペースなのかしら。
考えつつも、開かれたお弁当の中身を見る。
ウィンナー、煮物、おにぎり、からあげに厚焼き玉子など、定番といえるような内容の物が詰まっていた。
卵焼きには少し焦げているものがあり、それは少女が作ったものだった。
前回のように悲惨な結果にならなかったのは、青年の手伝いがぎりぎり間に合ったからである。
一緒に包んであったおはしで卵をつまんで食べる少女の頭の中では。
……まだ、大丈夫よね。前よりは、ましなはず。ちょっと苦いけれど。

自分の作ってしまった料理についてのことでいっぱいだった。
青年はおにぎりをぱくつきながら、桜を眺めていた。
相変わらず青年の料理はよく出来ていて、少女のはしはよく進んだ。
あらかた二人は食べ終えると、何もいわずに桜を眺めていた。
舞い散る花弁を見ていると、少女の脳裏にいつかの光景が浮かんだ。
まだ、わたしが独りじゃなかったころ――

眩しい日差しの下で、シートを囲んでお弁当を広げていた。
二重三重、多すぎるくらいのお弁当を囲んでいるのは、わたしと、母と父。
桜の木の周りはうるさいくらいに賑やかで、大勢の人が楽しそうにしている。
綺麗に敷き詰められたおかずを、三人のはしがつつきあう。
家事とは無縁のように見える、すらっと細くてしなやかな、赤いマニキュアの塗られた母の指。
節くれだってはいないけれど、力強さを感じさせる大きな父の指。
お弁当箱から顔を上げれば、父は桜を見ながらお酒を飲んでいてほろ酔い。
隣には、そんな父をたしなめながらも、穏やかに微笑んでいる母の姿。
時折、父の頭についてしまった花弁を母が取ってあげていた。照れくさそうに微笑む父。
それを眺めながら、大きすぎるおにぎりを食べている、わたし。
穏やかで、しあわせで、暖かな記憶の光景。通り過ぎてしまった、戻れない風景。

青年が小さくくしゃみをした音で、少女は一度ゆっくりと瞬きを

した。

今まで、昔のことなんて思い出したくもないと思っていたのだけれど。

振り返ってみるのも、悪くはないと思えるようになっていた。

そんな自分に驚きつつも、嫌な気持ちにはならなかった。むしろ、心地よいかもしれなかった。

懐かしくて、温かくて、少しだけ胸が痛むけれど。

そういうものなのだから仕方がないと、そう思えば楽になった気がした。

深呼吸をしてから、青年の方を見た。

いつのまにかお弁当は片付けられていて、青年はまだぼんやりと桜を眺めていた。

「そろそろ、戻った方がいいかしら？　少し風が強くなったわ」

気が付くと、だいぶお昼を過ぎていたし、通る人の量も減っていた。

くしゃみをしていたのも気になった。お花見にきて風邪を引いたなんて、笑えないもの。

少女の言葉に頷いた青年と共に、二人はベンチから立ち上がった。

その際に身体に乗っていた花弁が数枚落ちたが、青年の髪にはまだいくつか絡まったままだった。

ただ座っていただけなのに、どうして絡まっているのかは不思議だったが。

少女は背伸びをすると、青年の髪についていた花弁を払い落とした。

青年は少し驚いていたが、やがて少女に言った。

『ありがとう』

音のない言葉は聞こえなかったが、少女の心にはしっかりと届いた。

少しぎこちないながらも、少女は微笑んだ。目を細めて桜を見ながら青年は言った。

『また、来年もお花見に来たいね』
二人で、といったのか、一緒にといったのか、少女には読み取ることができなかったけれど。
「そうね。お花見も……悪くはないわ」
答えて、二人は家に戻るために歩き出した。

熱うかされた春の日

その日、青年が少女の異変に気づいたのはお昼を少しばかり過ぎてからのことだった。

普段は午前中には必ず起きてくるはずの少女が、珍しく起きてこなかったからだ。

どうしたのかと思い、青年は少女の部屋に向かった。

扉をノックしたが返事がないので、ためらいつつも部屋へと青年は入った。

少女が眠っているベッドへと近づき様子を見ると、顔が赤かった。

身体を揺すってみたものの、微かにうなり声が聞こえるだけで。

もしやと思い額に手を当ててみると、熱かった。

どうやら、先日のお花見のときに誰かから風邪をもらってきてしまったらしい。

そうとわかって青年は少し慌てたが、かいがいしく世話をした。

氷枕を作り、おかゆやゼリーを作ってみたり。

台所と部屋を行ったり来たりしていると、少女が身じろぎした。

思わず、大丈夫かといいたくなったが、自分は声が出せないのだと思い出す。

このときばかりは、少女の名前を呼んであげることのできぬ自分を、青年は恨めしく思った。

目が覚めたらしい少女は、ベッドから身体を半分だけ起こした。

夢うつつなのか、視線はふらふらとしている。

そんな少女に青年は慌てて、大丈夫？　と書いてある紙を手渡した。

実際、少女は熱があるのだから、大丈夫も何もないのだけれど。

慌てた青年には気にならないようで。

「――なんで、ここにいるの？」

ぼうっとしたまま少女は青年にたずねた。どうして自分の部屋にいるのかが気になったのだろう。
『熱、あるみたいだけど、大丈夫？』
青年の口の動きをじーっと見てから、少女は手渡された紙へと視線を移した。
「そうね……あっつくて、くらくらする。風邪、引いたのね」
返事をして、紙を青年へと戻した。すると、すぐにまた何かを書くと青年は少女へと渡した。
『なにか、食べ物は口にできそう？』
「食べられるかはわからないけど……お腹はすいてるみたい」
少女の言葉を聞いた青年は、待ってて、と伝えると部屋を後にした。
作っておいた料理やら何やらを持ってくるのだろう。
少女はしばらくぼーっと青年の出て行った扉を見ていた。
頭が重いわ……それに、すごく熱い。まるで燃えているみたい。
風邪なんて引いたの久しぶり。路地裏で眠っていても、風邪なんて平気だったのに。
誰かと一緒に生活してるから、気でもゆるんだのかしら。
だからといって、前みたいに常に回りに気を配るっていうのも無理よね。
はぁ……頭いたいわ。
少女が悩んでいると、青年が戻ってきた。手で持っているお盆には、いくつかの器がのっていた。
そのままサイドテーブルへと青年は器を並べていく。
湯気のたちのぼるそれを見て少女は言った。
「これ……おかゆ？」
『そうだよ』
頷いて、青年は唇を動かした。食べやすいようにと配慮したようだ。
「熱いときに熱いものを食べたら、余計にあつくならないかしら？」

手渡された器を落とさないようにしながら少女がたずねた。
渡し終えると青年は紙にさらさらと返事を書いた。
『こういうときは、熱いものでも食べて、汗をかいたりした方がいいんだよ』
そういうものなのかしら……と疑問に思いながらも少女は、スプーンを動かす。
あまり料理の腕が関係なさそうなおかゆでも、青年が作ったものだからか、美味しかった。
味が濃すぎることもなく、薄すぎるわけでもなく。
ひじきと、卵が入っていて、優しい味がした。
料理は、作る人の性格がでるのだと少女は思った。
しかしさらに少女は思った。性格が味に出るのなら、自分の料理はどうすればいいのかと。
「……気のせい、よね」
ぼそぼそと呟きだした少女に、青年は首をかしげる。何が？　と目がいっている。
なんでもないといいながら、少女は食事を再開した。
不思議そうにしながらも、青年は少女のお世話を続けた。

「そういえば……聞きたいことがあるんだけど」
あの後青年が運んできたゼリーを食べ終えた少女はいった。
なに、と口の動きだけで青年は続きをうながした。
「今さらいうのもあれなんだけれど、ずいぶんとまめなのね。ご飯とかも作ってくれたし。
わたしのことなんて、ほうっておけばいいのに」
食事を終えたせいか、再びぼうっとしてきているようだ。
首を横に振りながら、青年は紙に書いて渡した。
『そんなことできるわけないじゃないか』
「どうして？　それは拾ったから、責任感？」
違う、と青年は先ほどよりも強く首を振る。それをぼんやりと少

女は眺めている。
少し雑な文字が書かれた紙には、こう書いてあった。
『ただの、おせっかいだよ。君を拾ったのも、君が独りだったからだよ』
それを読んで少女は――
「やっぱりあなた、変な人ね。変わってるわ」
それはどうも、と唇を動かしながら、青年は肩をすくめた。
おどけているような、呆れているような、そんな仕草だった。それでも顔は笑っていたけれど。
青年にしては、珍しい仕草だった。
「そろそろ……また寝るわ。……ありがとう」
そういうと少女は毛布をかぶりなおして、眠る体制に入ってしまった。
『おやすみ』
そういうと青年は少女の部屋を後にした。

台所で食器を片付けながら、青年は一つ咳をした。
その反動で、うっかり食器を落としそうになってしまい、少し慌ててキャッチした。
『風邪……うつったかな?』
コンコンと咳をしながらも、青年は洗い物を続けている。
後で薬でも飲んでおこうと思いながら、青年は食器を拭き始める。
僕はともかく、彼女の風邪が早く治るといいのだけれど。
自分のことはあまり気にせずに、人の面倒ばかりを見てしまう。
お人好しな青年なのであった。
そんな青年に拾われた少女は、幸か不幸か。少女にしかわからないのだけれど。
熱にうかされながら、暖かな春は通り過ぎていった。

夜を照らす灯火の花

夏の夜は蒸し暑く、他の季節に比べると、暗さも薄いような気さえする。

吹き抜ける風は生ぬるく、心地よいとはあまりいえない。

二人が暮らしている家の庭先では、闇を照らすかのように火花がはぜていた。

少女と青年が花火をしているのだった。

瞬間的に音がしたかと思うと、持ち手の先から、火花が吹き出る。

その炎の色は、緑やオレンジ、青や黄色などカラフルで、どれも温かみを感じる色だ。

少女はそれを眺めながら、綺麗だと思った。

打ち上げる大きな花火もきれいだけれど、自分のすぐ傍でやるのもいいわね。

はじける火花を見ながら、少女は向かい側にいる青年に話しかけた。

「小さい花火も、綺麗ね」

少女に向かって、青年は頷きながら微笑む。

普段ならば紙に書き渡すのだが、今晩は危ないからと持ってきていない。

つまり、少女が何をいっているのか読み取るしかないのだ。

家を出る前に、なるべくわかりやすいように口を開けると青年は言っていた。

たとえ紙ごしでも、話せないと少し退屈ね……

そんなことを思いながら少女は花火を見る。

この時期になれば、あちらこちらで売っている、花火のセット。

本格的なものから、ちょっとしたもの、すごい動きをするもの。

たくさんの種類がある。
打ち上げるものもあったのだけれど、迷惑になるからと普通サイズのセットを青年が買ってきた。
元はといえば、置かれていた新聞を何気なくめくった少女の一言から始まったのだ。

「花火大会？」
その記事には、近々行われる花火大会についてのことが記されていた。
開催場所は書いてあったが、少女の知らない場所。
わかったのは、その大会が随分と大きなもので、大勢の人が見に集まるということ。
去年のものらしき写真が文章のそばに掲載されていた。それはモノクロ印刷だったが、華やかだった。
色がないのに華やかに見えるというのも変だけれど……実際はもっと鮮やかなんだろうな。
『興味あるの？　花火大会』
「ううんと……花火は、見たことがないのよね。やったことはある気がするのだけれど」
少女の記憶の中では、お花見をしたことはあったが、花火を見に行ったのは覚えていなかった。
もしかしたら忘れているだけかもしれないのだが、それはあまりない気がする。
小さいものならば、家族でやったことがあるような。ずいぶんとうろ覚えなんだけど。
少女が伝えると、青年は置かれていた新聞を手に取り、その記事を見始めた。
しばらくの間、目線が上に下にと動いていた。
その様子を、何故だかはわからないが少女はどきどきしながら見ていた。

誰かがそれを見たならば、微笑ましく思って笑うことだろう。
少女の様子は年相応のもので、プレゼントを待ちわびる子供のようにしか見えないから。
記事を読み終わったらしい青年が、紙に何かを書いて少女に渡した。
そこに書かれていた言葉を見て、少女の表情が変わった。
『ここからだとね、ちょっと遠い場所なんだ……大変だと思うよ』
つまり、行きも帰りも大変だろうから、見に行くのは無理だろうということ。
青年の言葉は、この花火大会にいけないことを示していた。
――なっ、わたしったら、何を残念がっているのかしら。まるで子供みたいじゃない。
花火が見れないくらい……別にたいしたことじゃないわ……よね？
かわいそうになるくらいに、しょんぼりとしてしまった少女を見て青年は慌てている。
ぐるぐると自問自答している少女は、それに気づいていない。
なんとか落ち着こうとしているようだが、それがかえって逆効果になっている。
申し訳さなそうにしながら、わたわたとしていた青年は何を思いついたのか、紙に何事かを書き付けた。
そしてそれを手渡された少女は、少し落ち着きを取り戻した。
『花火は見に行けないけれど、庭でやることはできるから』
「やるって……ここの庭で？」
青年は頷きながら、別の紙を手渡した。
そこには、お店で売っている花火を買って、庭でやればいいというようなことが書いてあった。
お店のって、あれよね。子供向けとか、ファミリーパックとか色々とあるやつ。
『どうかな？　やっぱり見に行きたい？』
さっきは難しいといいながらも、同じ事を聞くあたり、この青年

の性格がでている。
この人は、変だけど、優しい人なのね……きっと。
そんなことを思いながら、少女は頷いた。
「ううん。庭で、花火がやりたいわ」

今思えば、庭で二人で花火をやる方を選んでよかったと思うわ。
だって、大会には人は大勢くるもの。
花火という言葉につられてしまったが、少女はあまり人混みは好きでない。
静かに花火をやる方が似合っていたのかもしれない。
鮮やかな火花をみて思った。
『綺麗だよね』
青年の方をみると、それに気が付いたのか唇がそう動いた。
ええ。花火はとっても綺麗。大きくても小さくても、それはおんなじだわ。
独りと二人でやるのでは、ずいぶんと楽しさが変わってしまうけれど。
この鮮やかな色は、冬にやっても綺麗だと思う。
雪の白や、冷たい空気にはとても合う気がするから。
でも、花火を一年中やったら、つまらなくなってしまうのだろうなと少女は思う。
それが当たり前になってしまったら、なんともなくなってしまう。
こうやって、夏にだけやるから、きっと楽しいのよね。
「花火って、夏にだけだから楽しいのよね？」
少女が青年に問いかけてみると、青年は唇で答えた。
『刹那だから、綺麗だし、楽しいんだよ』
ゆっくりといわれた言葉を少女は読み取った。せつな、という言葉の意味はわからなかったけれど。
自分の思っていることと、遠くないということはわかった。

そのまま二人で花火を続けていた。少ししか買ってこなかったので、そう数はなかったのだが。

何度も火をつけて眺めているうちに、最後の一本になってしまった。

あぁ、もう終わってしまうのね。綺麗なのに。

向かいを見ると、青年が家の中へと戻り、何かごそごそとしていた。

片付けの準備でもしているのだろうと思いながら、少女は花火を楽しんだ。

燃え尽きて、火花が散った後、それを水を張ったバケツにいれると音がした。

さて、どうしようかと少女が考えようとした時、青年が少女の肩を叩いた。

「何？」

少女が青年を見ると。手には小さな袋をもっていた。その中に入っているのは、二本の線香花火。

いつのまに買ったの、と少女が問うよりも早く青年は口を動かした。

『やろう？　どっちが早く落ちてしまうかな……』

そういいながら青年は少女に、線香花火を手渡した。

小さな花火を受け取った少女の顔は、ふわりと綻んだ。

チリチリと音を立てて、花火がはじける。

何かの模様にも見えるその火花は、眺めていて飽きることがない。

だんだんと大きさを増していく火花は勢いがあって楽しい。

顔を近づけすぎないように気をつけながら、少女は火花を見る。

花火越しに、青年の穏やかな顔も見えた。その顔色は少しだけ青白かった。

火花に照らされているのに、どうしてなのかしら。

不思議に思いながらも、だんだんと大きさを増していく火の玉を

見つめる。
とろりとしているのに丸い形を保っている玉は、青年のよりも少女の方が大きかった。
青年のは小さく安定していて、少女のは大きいがよく揺れている。時折ゆらりと揺れるから、ひやひやしながらも落とさないように注意する。
どちらが先に落ちてしまうかな、なんて彼はいっていたけど。意外に、落ちないものなのね。風がたいして吹いていないからかしら？
覚えている限りでは、大抵はすぐに落ちてしまったのに。
そうこうしているうちに、少しずつ玉が揺らめいてきた。
はらはらしながら、少女は自分のと青年の花火を交互に見る。
それは、本当に一瞬のことだった。
青年の手がわずかに震えて、火の玉がゆっくりと地面へ落ちてはじけた。
「あっ……」
思わず、少女は声をだしてしまった。そろりと、青年の方をみた。紙の柄をを持ったまま、青年は残念そうに微笑んでいた。
『僕の方が、先だったね』
そういいながら微笑む顔は、残念そうというよりも、寂しそうに少女には見えた。
そんな青年の表情を見て、少女は戸惑ってしまった。
ええっと……こういうときは、なんていえばいいのかしら。
あまり人に温かい言葉などかけてもらったことなどないから、何をいえばいいのかわからないわ。
ううん、と考え込んでしまった少女を、不思議そうに青年は見ていた。
その後、何を思いついたのか、少女は勢いよく顔を上げて、青年へといった。
「また、来年も花火……できるといいわね」

いったあと、少女は急に不安になった。
今ので、合ってたのかしら？　他に思い浮かばなかったのだけれど……
ぐるぐると考えて、言ったことが不安ではないということに気が付いた。

『また、来年も　お花見に来たいね』
「また、来年も花火……できるといいわね」

来年も。
前に彼が、今はわたしが使った言葉。
来年なんて、くるかどうかもわからないのに。明日だって確実かどうかはわからないのに。
二人で、来年の夏も花火をできるかなんてわからないの。
それが――わたしが不安に思っていること。
独りに戻るのが……怖いのかしら？
急に黙ってしまった少女をしばらく見ていた青年が、少女の手を握った。
いつのまにか、線香花火は落ちてしまっていた。
優しく微笑みながら青年はいった。
『そうだね……今度はもっとたくさんの花火をしよう。ふたりで』
少女は青年の顔を見てから、頷いた。
来年も、できるかどうかはわからないし、不安なまま。でも。
今このとき、彼がこういってくれるのだから、きっと来年もあるのだろう。
目の前にいる、お人よしの彼がいうんだもの。
その場しのぎだとしても、信じてみたい。少女はそう思った。
だから、青年に少女はいった。
「あなたは嘘なんて、つかなそうだものね」
一瞬、きょとんとした顔をした青年だったが。

『嘘をつけるほど、器用じゃないんだよ』
それを聞いた少女は、声を出して笑った。つられて青年も微笑んだ。
少女が空を見上げると、無数の星が夜空に浮かびあがっていた。
星を眺めながら、二人は後片付けを始めた。
二人の頭上では、星が一つ瞬いて——流れて消えた。

夜を照らす灯火の花（後書き）

夏というと、夜と、花火というイメージがあります。
後はお祭りですね。
暗い中光る花火は、とても儚くて綺麗ですよね。

寂寥を抱く夏の日

庭先からは、ひっきりなしに蝉の声が響いていた。
夏も半ばだというのに、虫の声は止むことを知らないかのよう。
強すぎる日差しにまゆをしかめながら、少女は庭先で洗濯物を干していた。
ハンガーにパチパチと吊るしていくが、時折風に揺られて少女の顔に衣服張り付く。
あぁ、もう、うっとうしいわね。それに、暑すぎるわ。
吹く風は熱をはらんでいて、とても心地よいものとはいえないし。
セミの鳴き声もうるさいわ。
うるさいだけならいいのだけれど……邪魔なのよね。
干していても、容赦なく木陰からこちらを目掛けて勢い飛んでくるし。
取り込もうとしたら、セミそのものや、ぬけがらがくっついている時もあるのよ。
なんというか、作業しづらいのだ。
ついついたたき落としてしまいそうになるのを、いつもこらえている。
青年に、無駄に生き物を殺してはいけないと前に言われたから。
ただでさえ、セミの寿命は短いのだから――と。
皺を伸ばしながら、少女は考えている。
たしかに、すぐ死んでしまうのは可哀想だけれど、この数はどうなのかしら。
生き延びるために必死なのだろうが、迷惑なことこの上ないの。
見た目も、近くで見るとかなり嫌だし。
つまり、少女はセミが苦手なのであった。

ぶつぶつ言いながらも洗濯物を干し終えた少女は、空を仰いだ。
日差しは眩しいけれども、温かくて力強い。空も、綺麗に晴れている。
本当に……この暑ささえなければ、すごくいい季節なのに。
干された洗濯物の近くでは、大きなひまわりが揺れていた。
立派に花を開かせて、太陽の光を求めて背を空へと伸ばしていた。
きっと、もう少しするとたくさんの種が零れるのだろうと少女は思う。
特別にいい香りはしないけれど、大きくて可愛い花だと思うわ。
ひまわりは、青年がここに住み着く前から咲いていたという。
誰もいなくても、咲き続けるなんてすごいと思う。
もしかしたら、誰かに見てもらいたいから咲いていたのかもしれないわ。
そのまま空を見上げながらぼーっとしてしまいそうになり、慌てて少女はかごを抱えた。
片付けなくちゃいけないわね。それに、ずっと外にいたら危ないわ。
この暑さと日差しのことだから、すぐに熱射病になってしまうに違いない。
部屋に戻った方がよさそうね。今は彼もいるから涼しいし。
少女が洗濯物に取り掛かる前、青年は居間で読書をしているといっていたから。
誰かがいる部屋は、基本的に冷房を入れるから涼しいのだ。
本は嫌いなわけではないけれど、あんなに毎日読んでばかりいて、よく飽きないなと少女は思う。
本人いわく、他にやることがないそうなのだが。
まぁ、彼の自由なんだから別にいいのだけれど。
居間へと戻るべく、少女は歩き出したのだが。
少し歩いたところで、いきなり大きな音が家中に響いた。妙に耳障りな、甲高い音。

驚いて少女は、思いっきりつんのめって、転んでしまった。かごが前へと転がる音が続いて聞こえた。
「ちょっと……！？　今の音、何なのよっ」
強かに顔面を床に打ちつけてしまったが、気にせずに居間へと向かって急いだ。かごは放り出されたまま。
今の大きな音はなに？　物を落とした程度じゃ、あんなに大きくはないわよね。それに高くもないわ。
あの音は……何かが砕けた音に近い。たとえば、食器を落として割れてしまうときの音のよう。
まだ少し動揺しながらも、少女は居間へとついた。
ソファーの近くに立っている青年に近づこうとしたら、動きで止められた。
「ねえ、今の音はいったい――――なに……ソレ」
何があったのかをたずねようとした少女の言葉は、中途半端に途切れてしまった。
青年のすぐ傍に散らばっているものに気が付いてしまったから。
テーブルの上には、恐らくさっきまで読まれていたであろう本が置かれていた。それはいい。
青年の足元、すぐ近くに散らばっているものが問題だったから。
ソファーの傍には、割れたガラスの欠片が散乱していたのだった。
ガラスの中には、投げ込まれたのか紙に包まれた石が見えた。
部屋の窓を見ると、ギザギザとしたガラスの残りが見えた。鋭く陽に煌いて、凶器みたいに見えた。
割れてしまった窓からは、生ぬるい風が室内に入ってきて、とても不快に感じた。
「ガラスっ……大丈夫なの！？」
離れた場所から慌てて青年に尋ねるも、返ってきた答えはとても静かで。
『平気だよ。いつものことだから、気にしないで』
窓ガラスが割られるのが、いつものこと？　――そんなのおかし

いわよ。
「気にしないなんて、できるわけないじゃない。何なのよ、いったい。誰の仕業？」
『慣れてるから』
その後も何度か少女は青年に尋ねたのだが、返ってくる答えはいずれも似たようなものばかりで。
話したくないのだろうけど、少しくらい言ってくれてもいいじゃない。
相手にされていないのかしら？　まったく。
内心色々と不満に思うことはあったものの、まずはガラスをどうにかしなければと少女は片づけを始めた。
庭へといったん戻って、ほうきとちりとりを持ってきてから、掃いた。
足を傷つけてしまわないようにスリッパもしっかりと履いた。スカートからズボンにもはきかえた。
別にそのままでも構わなかったのだが、なんだか気持ちの整理がつかなかったから。
袋に入れたガラス片がジャラジャラと音をたてて、ひどく耳障りに聞こえた。
いったい彼は何をしているのかと青年を探すと、割れたガラスの部分に新聞紙を張っていた。
とりあえずの応急処置のつもりなのだろう。
随分と手馴れた様子に見えたのは、気のせいじゃないわよね？
ガラスを庭にだしてこようと少女が立ち上がると、足元でカサリと音が聞こえた。
「確かこれって……石を包んでいた紙よね」
何の意味があるのかはわからないけれど、石を包んでいた紙が転がっていた。
くしゃくしゃに丸められているの妙に気になって。
拾い上げて、紙に書かれた言葉を見て、少女は絶句した。

――なんて、なんて嫌な言葉。
青年がちらと少女の方を見たのにも気が付かずに、再び紙を丸めると、ガラスと同じ袋に投げ入れた。
そのまま足早に庭へとゴミを置きに行った。
部屋を出て行った少女を見ると、青年はため息をひとつ吐いた。
その顔は普段と変わらない穏やかな表情だったが、どこか疲れが滲んで見えた。
ガラス片が残っていないかと素早く確認すると、何事もなかったかのように本を読み始めた。

数分後、戻ってきた少女が再び青年に詰め寄った。さきほどよりは、勢いがなかったが。
「ねぇ……よくあるの？　こういうことって」
少女が見た紙には、青年に対する侮蔑の言葉が書かれていた。
障害を持つ者への、これ以上もないくらいに酷い言葉。
思い出すだけで……気分が悪くなってしまいそう。
顔をしかめる少女を気にしながらも、青年はうなずいた。そして紙に何か書くと手渡した。
『今日は、ガラスが割れただけでよかった。怪我もしていないし』
「え……それじゃあ、もっとひどいときもあるのね？　どうして何もしないのよっ」
割れただけ、という軽い言い方がひどく気になった。もっとすごいときもあるのだろう。
ガラスのせいで怪我をしてしまったり？　……投げられた石が当たってしまったり？
――考えたくもないわ。
信じがたいことだが、二人とも無事だったのはマシな部類に入るのだろう。
『仕方がないんだよ』
青年は、ただそう唇を動かしただけで。また本を読み始めてしま

った。
もやもやとしたものを抱えながらも、少女は洗い場にたって、食器の整理を始めた
人と、直接言葉を交わすことができない。話すことができない。
それが、そんなにも変わったことなの？
考えることはできるし、直接でなくとも会話をすることだってできるのに。
少し、普通の人とは違う部分があるだけで。人間は、それを忌み嫌う、過剰なまでに。
疎ましく思い、見ないふりをしようとしたり、迫害したりする。
どちらも同じ人間だっていうのに。
埋めることのできない決定的な溝があるのだろう。悲しいことだけれども。
手を差し伸べてくれる人なんて……ほんのわずか。たとえるなら、彼みたいに。
路地裏で生活をしていた少女も、同じような経験をしたことはある。
そのたびに、仕方のないことだと諦めてきたはずなのに。
青年がそういう扱いを受けているの目の当たりにして、こんなにも揺らぐなんて。
こんなわたしが心配してあげたって、ただの同情にしか思われないのに。
それでもほっとけないと思うなんて、わたしもどうかしているわ。
考え事をしながら片付けていたから、自然と手元がおろそかになっていたのだろう。
しまおうとしたお皿が一枚、床に滑り落ちて大きな音をたてた。
「あっ……何やってるのかしら」
ため息をつきながら、大きな破片を拾おうとして、指先を少し切った。
慌てて手を引っ込めて指先を見ると、薄く血が滲んでいた。

……傷は、やっぱり痛いわ。
道具を取りに行こうとすると、少女の肩を青年が叩いた。振り向くと、掃除道具をもって立っていた。
心配そうなまなざしで少女を見つめていた。
大丈夫と返事しながら、少女は手早く床を片付けた。
ごみを庭に出してきた少女は青年にいった。
「それじゃあ、わたしは部屋にいるから……何かあったら言ってね？　絶対よ」
『わかった』
そのまま少女は居間を出て行こうとして、ぴたりと止まった。
青年が首を傾げていると、少女は青年に告げた。
「あなたがわたしのことを拾ったように……わたしも、あなたのこと放っておけないの。
ただのおせっかいだけどね。――忘れないで」
わたしは、あなたのこと嫌いじゃないから。
そうして、少女は自室へと向かっていった。
少女が出て行った扉を見つめて、青年は呟いた。
『ありがとう』

寂寥を抱く夏の日（後書き）

口がきけないと、それだけで大変な目にあうような気がします。
変に哀れまれたり同情されたりするのも、気分がよいものではないでしょう。
対等に、そこにいる一人の人間として接してくれるような。
そういう人、少ないのでしょうね……残念ながら。

氷を溶かす朧月夜

蝉の声に代わって鈴虫の声が響く季節になった。
その日、少女はふと夜中に目を覚ましてベッドから身体を起こした。
何か嫌な予感がしたとか、物音がしたとかそういうわけではなくて。
「のどが、かわいたわね」
もそもそとベッドから降りて居間へと向かう。途中青年の部屋を覗いてみたが、よく眠っていた。
居間の中は、夜だというのにほんのりと明るかった。
台所へ行き、コップに水を注いでひと口飲んだ。水道の水は冷たくて、頭に響いた。
コップを置いて、部屋の窓を見ると、淡い月光が差し込んでいた。
誘われるように少女は窓へと近づき、空を仰ぎ見ると綺麗な満月が闇に浮かんでいた。
月には時折雲がかかって、おぼろに見える。
居間が明るいのは、月明かりのおかげだったのね。
浮きでるかのように、ぽっかりと浮かぶ丸い月は、見ているととても落ち着いた。
水のせいで頭も冴えてしまって、もう一度すぐ眠ることはできなさそうだった。
「少しくらいなら……眺めていても、いいわよね」
月をじいっと見ていると、うっすらとだけれどでこぼこのような模様が見えて。
……そういえば昔、月にうさぎがいるといかいう話を聞いたことがあるような……

こうして見える模様が、たまたまうさぎに見えたのだろうか？
本当にいるとは思えないけれど、そんな見間違いもあってもいいかもしれないわね。
――なんでわたしったら、こんなこと考えているのかしら。
前だったら、そんなこと疑いもしなかったのに。
こういうの……ほだされたって言うのかしら？　でもそれじゃあ彼に失礼よね。
月を見ているせいか、色々なことを思い出す。
まだ家族一緒だったころのこと、置いていかれたときのこと。今までのこと。

わたしのお母さんは外国人で、わたしのお父さんは日本人だった。
ふたりがどういういきさつで出会ったのかわたしは知らない。
でもわたしが知る限り、ふたりの仲はとてもよかった。
だから、家族に終わりがくるなんてわたしは考えてもいなかったの。
お母さんは綺麗で優しかったし、お父さんもとても真面目な人だった。
真面目で、一途だったから、耐えられなかったのかもしれないのだけれど。
お父さんにはお母さんしかいなかったけど、お母さんにはそうじゃなかった。
冬の寒い朝の日だった。
起きてあいさつをしようとしたら、居間の中でお父さんが立ち尽くしていた。
まるで棒みたいに、身動きひとつしなくて。その向かいにはお母さんが立っていて。
普通じゃない雰囲気で、わたしはふたりに声を掛けることもできなかったのを覚えている。

少しして、そのままお母さんは家を出て行ってしまった。
後からわかったのは、お母さんが浮気をしていたということ。
そのまま、浮気相手のところへいってしまったらしい。
お父さんは怒らずに、泣いて引きとめようとしていたけれどダメだったということ。
お母さんが家をでていった次の日。
わたしが居間へいくと、お父さんがぶら下がっていた。
首吊り自殺だった。あの苦悶の表情は、わたしはきっと忘れることができないと思う。
こうして、わたしは独りぼっちになった。
学校へはしばらくは通っていたけれど、途中から行かなくなった。
外見のせいで、わたしはうとまれていたから。別に楽しくもない場所に行きたくもなかったから。
お父さんの親戚中たらいまわしにされたけれど、どこもわたしのことを好んでいる所はなくて。
何回目かのときに、わたしはその家を出た。
きっと、わたしがいなくても、その家の人たちはなんとも思わなかっただろう。
むしろやっかいばらいができて、せいせいしていたのかもしれない。
それからは、浮浪児のような生活をして今まで生きてきた。

本当に、今こうやって屋根のあるところで生活できているのが、不思議で仕方がないわ。
青年が少女に手を差し伸べなければ、きっと寒空の下の暮らしは続いていたのだろう。
最初は、なんて変わった人なのかしらと思っていたのに。今は感謝しているなんて。
こんな風に思っているわたしも、きっと変わったに違いないわね。

ずうっとあのままだと思っていて、変わりたくはないと思っていたはずなのに。

変わってしまうと、わたしがわたしではなくなってしまうような気がしていたから。

過去なんて振り返るのは、いやだったのに。だって、寂しくなってしまうもの。

でも、いざとなるとそんなに悪くはないわ。

……凍えているよりはとってもいいし、楽しいもの。彼が喋れなくたって問題ない。

今はこの生活がずっと続けばいいと思う。本当に続くはずはないとわかっているけれど。

でも、来ない日を考えて沈むよりは、今日のこの日を楽しむ方がいいんじゃないかと思うようになった。

わたしの中にいままであった、冷たくて硬い氷。それはいつのまにか溶けてしまっていたらしい。

きっと、あたたかい誰かにあてられてしまったのだろう。綺麗な月のせいもあるかもしれない。

本当に一人で見るのがもったいないくらいな月だと少女は思った。

どうしようかしら……起こそうかしら？　でも眠ってるわよね、当然のことながら。

それなら、明日みればいいわよね。月はいつでも見れるのだし。

明日は――晴れるといいな。

そのまま少女はうとうとしながらも、月を眺めていた。

差し込む月光はまるで少女を包み込むかのようだった。

青年が居間で眠り込んでいる少女を見つけたのは、少女が眠ってから少し後のこと。

なんとなく目が覚めた彼は、少女の様子を見てみたところ部屋にいなかったので。

どこで寝ているのかと居間に来て見たのだった。
窓の近くで座り込んで眠っている少女を見つけて、青年は一安心した。
一安心してから、自分が着ていた上着を少女にかけてあげたのだった。
こんなところで寝て、風邪をひいてはいけないからね。
部屋まで運ぼうかとも思ったが、起こしてしまってはいけないと考えた結果だった。
明日少女が起きたら、ちゃんと寝るときは部屋に戻るように注意しようと青年は思った。
すうすうと眠り続ける少女を見るその顔は、柔らかく優しい笑みで彩られていた。

氷を溶かす朧月夜（後書き）

秋の夜っていいですよね……月きれいですし。
ススキとか用意したくなります。

散り急ぐ秋の日

色づいた葉が地面に積み重なり、かさかさと乾いた音を立てた。
寒い風が吹くこの日、商店街へと少女と青年は買い物に来ていた。
昼間だというのに、冷たい風のせいで凍えそうだった。
本格的に冷え込んでくる前に、ひととおりのものを買い揃えてしまうためだった。
本来なら響くはずの足音は、枯葉に吸収されてしまって静かだった。
しかし商店街は賑やかで、大勢の人がひしめいていた。
青年と並んで歩きながら、少女はしきりに青年の様子を気にしていた。
「ねぇ、本当にもう大丈夫なの？　まだちょっと顔色が……」
『大丈夫だよ』
先ほどから似たような質問をしてくる少女に向かって、青年は安心させるかのように微笑んだ。
大丈夫とはいっているが、青年の顔は少し青白い。
全然大丈夫そうには見えないわ……と少女は思った。
先日まで青年は体調を崩して、寝込んでいたのだ。高熱が三日間も続いていた。
少女は慌てふためいて、自分が知っている限りの方法で手厚く看病をした。
その看病というのも、あまりしっかりとはしたものではなかったのだが。
ねぎを喉に巻こうとして、青年に拒否されたことも含めて。
少女がそんなものをもちながら部屋に入ってきたので、青年はかなり驚いた。

結局そのねぎはおかゆに利用されることになった。青年は寝込んでいるので、作ったのは少女。

本を見ながら頑張ったおかげか、なんとか普通のものができあがっていた。

少女の看病のおかげか、青年の体力なのかはわからないが、無事起き上がれる程度には回復したのだった。

まだ休んでいるように少女はすすめたのだが、青年はしきりに買い物に誘ったのだ。

物が足りなくなったなら、その時に買いに行けばいいのにと少女は思う。

病み上がりというか、半病人みたいな状態で、連れ回したくはないのに。

家から少し歩いた所にある、わりと大きなこの商店街。

クリスマスが近いせいもあるのか、ずいぶんと大勢の人で賑わっている。

人がたくさんいれば、それだけで体調が悪化しそうな気さえしてくる。

隣を歩く青年に向かって少女は言った。

「買い物、手早く済ませちゃったほうがよさそうね？」

「そうしようね」

唇だけで話してから、青年は少女に買い物リストの紙を渡した。

家にいるとき、事前に青年が書いておいたものである。

必要なものが一通りメモしてあるので、それを見ながら少女が買い物をするという方法。

少女は店などは知らないので、そこは青年が案内するというふうになっている。

紙を受け取ると少女は、スタスタと一人で歩き出してしまった。

どこへいくのかと慌てながら、青年は後をついていった。

少女が歩いていった先には、日用品や生活用品が売っているお店があった。

青年が、なんでわかったのかと首を傾げていると少女がいった。
「看板を見ればそれくらいわかるわ……もう、子供扱いしないでよね」
ぷりぷりとしながら、少女は次々に買い物をはじめた。
リストにはかなりたくさんのものが書いてあったが、どれもがよく使うものなので探すのには手間取らなかった。
そのほかにも食料品や、雑貨など、青年が案内しながらふたりは買い物を進めていった。
用が済むにつれて、青年の持つ荷物がどんどんと増えていく。
少女は少しくらいもてるといったのだが、このほうが買い物が早く済むと青年にいわれたのだった。
確かに、袋を持ちながら店内を移動するのは、大変なことになりそうだったのだけれど。
一通りの買い物を終えたころには、青年の両手はビニール袋でふさがっていた。
そんなにたくさん買う必要があるのかというほどの荷物だった。
いったい何ヶ月分の物なのだろうか。
本当にしばらくは買い物にでなくてもいいくらいの量になっていた。
「えっと……買い物はこれで終わりかしら?」
『終わりだね』
青年が頷いたのを確認してから、少女は家へと向かって歩き始めた。
その途中、いつのまに書いたのか、青年が少女に紙を手渡した。
『いったん荷物置いたら、僕は他に買うものがあるんだけど……君はどうする?』
文字を読んだ少女は、どうしようかと首をかしげた。
別に家にいてもいいのだけれど、一人だとなんとなくつまらないのよね。
でも特に欲しいものもないし……むしろお金なら余っているわ。

少女は毎月、少ないけれども青年からおこづかいをもらっているのだった。

青年は働いてはいないようだったけれど、それなりにたくわえがあるようだった。

別に必要ないわ、と断ったのだけれど青年に押し切られた覚えがあった。

使わないなら、とっておけばいいんだよ。急に何か欲しくなるかもしれないしね。

けっこう彼って……押しが強いというか、譲らないところがあるのよね。

そういえば彼はいったい何を買うのだろうか。さっき一通りの買い物はしたはずよね。

ということは……きっと、個人的な買い物なのね。

無駄づかいはしないとはいえ、少女もたまに好きな本などを買ったりしている。

「わたしは……本屋にでも寄って、時間を潰しているわ。終わったらきてくれる？」

『わかった』

その後家で荷物を整理してから、二人は別行動になった。

さきほど青年にいったとおりに、少女は本屋へと来ていた。

よく買うシリーズの最新刊がでていないかどうかを確かめたかったのだ。

ミステリのジャンルに入るであろうその本は、様々な年代に人気がある本で、売り切れるのも早いから。

商店街と同じように人が多い本屋の中を、ぶつからないように注意しながらすり抜けていく。

そのシリーズが置かれている棚を見つけたものの、残念ながら売り切れてしまっていた。

まぁ……売れてしまったのならば、仕方がないわよね。また今度買いにくればいいわ。

目当てのものがないので、今度は本当に時間つぶしをはじめた少女。

少し気になるものがあったら、ぱらぱらとページをめくってみる。

本屋のそこかしこには装飾がほどこされていて、冬の到来が間近だとわかる。

店内にも子供連れの家族が多く、みな楽しそうな雰囲気だった。

前はよく、こういう雰囲気を感じると、何だか逃げ出したくなるような衝動に駆られていたけど。

今はそんなに気にならなかった。

ふらふらと店内を物色していると、一冊の小さな絵本が目にとまった。

児童向けのコーナーにおいてある、サンタクロースが表紙に描かれている本。

手前の方には置かれておらず、奥のほうにひっそりと置いてあった。

あるところに、ひとりのおっちょこちょいなサンタと一匹の身体の弱いトナカイがいました。

ふわふわとした雪が降る夜、大変なことが起きました。

子供達に配るプレゼントの袋を、どこかにやってしまったのです。

その夜はクリスマス。子供達にプレゼントを渡さなければならない日です。

夜が始まったばかりの時間。サンタとトナカイは必死で袋を探しました。

二人は別々の場所で、それぞれ雪がつもってもプレゼントを探しました。

時間が過ぎ、日付が変わってしまうころに、トナカイが戻ってき

ました。
トナカイは口にプレゼントの袋をくわえていました。これで配れるぞ、とサンタは喜びました。
けれど、寒い中必死でプレゼントを探したトナカイは、無理がたたって死んでしまいました。
サンタはとても悲しくて、大きな声で泣きました。それでも、子供達はプレゼントを楽しみにしています。
サンタは一人で子供達にプレゼントを配りました。
雪降る夜に、大きなくつあとをつけながら、それぞれの家にプレゼントを配りました。
配り終わったころには、夜明けがちかづいていました。
トナカイの冷たい身体を土に埋めて、サンタはお墓を作りました。
そこにプレゼントをひとつ置いて、サンタは自分の国へと帰っていきました。
きっと次の冬も、サンタはひとりでプレゼントを配るのでしょう

――

ぱらぱらと絵本を読み終わった少女は、不思議な物語だと思った。
こういうものって、最後は大抵ハッピーエンドなのに……珍しいわね。
トナカイが死んでしまっているから、ハッピーエンドじゃないよね。
でも、サンタはプレゼントを配ることはできたのよね。
トナカイを失ってしまったけれど、彼（人ではないけれど）のおかげで袋は見つかった。
……いいのかわるいのか、よくわからない絵本。
このサンタは、トナカイをなくした代わりに、何か大切なものを得ることができたのかしら？
きっと、サンタにしかわからないわね。

読み終えた絵本を元に位置に戻すと、後ろから肩を叩かれた。
振り向くと、青年が微笑しながら立っていた。
『何みてたの?』
「子供向けの、絵本」
唇だけの問いかけに、少女はそう答えた。
青年は手に小さな紙袋を持っていた。きっと買ってきたものなのだろう。
「もう用は終わったの?」
そう少女が尋ねると、青年はひとつうなずいた。
『君のほうは?』
青年の問いかけに、少女もうなずいた。
元々探していたものもなかったし、さっきの本も見終わった。もう用はない。
「それじゃあ、帰りましょうか」
さきほどよりは少し人の減った本屋をでて、二人は家路についた。
外にでると日は傾き、人々が帰り道を急いでいた。
枯葉が風に吹かれて、道を飛んでいく。
ふたりだけではなく、誰もがきっと感じているのだろう。
冷たくて寒い、冬の到来を。

散り急ぐ秋の日（後書き）

季節は何があろうともめぐりますね。
まるで何もなかったかのように、ひたすらにめぐりますね。
秋は、ちょっぴり寂しい季節です。

涙零れた冬の日

冬は、寒くてなかなか眠りにつくのが大変なものだ。
ましてや、その日外では雪が降っていたのだから、なおのこと。
やっと落ち着いたかと思うと、隙間風で目を覚ましてしまったりする。

静かなその夜。ついさきほどまで寝ていたはずの少女は目を覚ましていた。
何故かはわからないが、目が覚めてしまったのだ。
少女の部屋にも居間と同じように暖房が設置されているし、ベッドの中にゆたんぽも持ってきてある。
だから、寒くて目が覚めたのではないはずだ。
ふとんをかぶったまま、しばらく少女は目をぱちぱちとさせていた。
起きちゃったけれど……どうしようかな。
枕もとの時計を見てはみたものの、まだ夜中に一時。起きて何かをする時間じゃない。
かといって、このまま眠ることもできなさそうな感じだった。
夜更かしをしたわけじゃあないのに、なんでこんなに頭がすっとしているのかしら。
意識が冴えてしまって、ちっとも眠くないわ。
とりあえず……何か飲んで、後はベッドで頑張ってみようかしら。
寝よう寝ようと意識するほどに、眠れなくなったりするものなのだけれど。
もそもそとベッドから出ると、ぶるりと身体が寒さで震えた。
暖房の名残はあるものの、やはりついていないと寒い。

身体をぎゅっと抱きしめながら、居間へと少女は歩いていく。
途中、青年の部屋を覗いてみたものの、暗くてよく見えなかった。
静かだから、よく眠っているようだった。ぼんやりとだがかけられているふとんが見えた。
昼間部屋を覗くと、しっかりとふとんが畳まれている。
だからいまも、きっとしっかりとふとんが身体に掛かっているのだろうと少女はおもった。
わたしなんかは、よく落としたり、ずれたりするのに。性格かしら……
そういう場合、たいていは気づいた青年がちゃんと直してくれているようである。
その後居間へと向かう途中、暗いせいか何度か少女は壁などにぶつかってしまった。
仕方がないので、廊下の電気をつけることにした。青年の部屋の扉はちゃんと閉めてある。
台所へ行き、牛乳を耐熱コップにいれて暖める。
寒いときは、温かいものが一番いいわよね。
なかでもホットミルクは、飲むと何故だかうとうとと眠気がやってくるからありがたい。
暖め終わったものにはちみつを加えて、しっかりと混ぜてから飲む。
熱い感覚が、喉を通り過ぎて胃のあたりへと落ちていく。
お腹の底からぽかぽかと暖かくっていく感覚が心地よい。
ほう、と口から吐息がもれる。台所にたったまま、ゆっくりと飲み干した。
さっきより、少しは落ち着いてきたような気がする。
未だに眠気は訪れないままだったが、いつまでも寒いところにいてもどうしようがない。
少女は自分の部屋へと戻ることにした。
戻る途中で、少女はまた青年の眠る部屋を覗いてみた。

開けた扉の隙間から差す明かりで、少し斜めにずれているふとんが見えた。

少しでもずれていると、隙間から寒い空気が入って、凍えてしまいそう。

そう思った少女は、青年を起こさないように静かに部屋へと入った。

ベッドに近づく途中、部屋に置かれていたテーブルにぶつかってしまった。

隙間から差す明かりを頼りに、青年の身体にしっかりとふとんを掛けなおす。

ふだんは、わたしが直されているのかもしれないわね。

そんなことを思いながら、ずれた布団を直していると、うっかり青年の身体に触れてしまった。

起こしてしまう、と思って、慌てて青年の眠っているベッドから離れた。

数秒たったけれど、青年には起きる様子がなかった。

起こしてしまわなかったのだから、少女は安心して部屋からでていけるはずだった。

けれども部屋から出て行かずに、少女はその場に立ち尽くしていた。

薄暗い部屋の中で、今青年に触れたばかりの自分の手を穴が開きそうなくらいに見ていた。

冬の夜は、寒く凍える。だから、眠っているうちに身体が冷たくなってしまうことはよくある。

けれども。

人の身体が、氷みたいに冷たくなるなんてことはないわ。だって、生きているんだから。

なら、なら……今彼の身体に触れた指先が感じた冷たさは、間違い？

少女は、彼に声を掛けようと思った。起きてしまうことを承知で。

自分の考えていることが、嘘で何かの間違いなのだと証明してもらうために。

そう、きっと悪い夢なのだと。彼にそういってほしかったの。

だからわたしは、彼の名前を呼ぼうとして——呼ぶべき名前を知らないことに気が付いて愕然とした。

わたしは、彼の名前を知らない。……わたしの名前を、彼は知らない。

酷いめまいのように、ふらふらとして、今にも倒れてしまいそうになる。

寒さではなく震える指で、たった今直したばかりのふとんをはがして、彼の身体をゆすった。

最初はそっと。だんだん激しくゆすったものの、青年は目を覚ますことはなかった。

胸に触れた指からは冷たさしか伝わらなくて。望んでいた鼓動を感じることはできなくて。

どうにもならないとわかっていたけれど、少女は青年の亡骸を抱きしめた。

彼の身体に、少しでもこの体温が伝わってくれればいいのに。

冷えてしまった身体を離して、少女は青年の顔を見た。その顔はとても穏やかな表情をしていた。

ベッドの傍に立ちつくしまま、少女はぐるぐると考える。

彼は……どうして死んでしまったのかしら。一体何が原因だったのかしら。

まだ風邪は治っていなかったの？　それとも何か別のことが原因で？

ああ、わからない。

苦しそうな顔はしていなけれども、つらくはなかったのかしら。

痛くはなかったのかしら。

何も感じずに、いってしまったのかしら。この冷たい部屋で一人きりで？

彼は声がだせないのに。苦しいとも痛いともいうことができないのに。

夜寝る前に、ちゃんと挨拶もして……動いて、生きていたのにどうして。

いつなくなったのかもさえもわからないなんて。せめて傍にいてあげられればよかったのに。

こんなに突然いなくなるなんて、まったく考えていなかったわ。

いつまでもとはいわないけれどまだこの日々は続いていくと思っていたのに。

いつだって、死神は唐突にやってきて、有無をいわせずに誰かを連れ去っていく。

病院とか、警察とか、やるべきことはあるはずなのに身体が動かなくて。

部屋の明かりをつけることが、その時の少女にできる精一杯のことだった。

明るくなった部屋で見る青年の顔は穏やかなままで。よけいに悲しくなった。

こらえきれずに視線を横にずらすと、テーブルの上に何かが置かれているのに気づいた。

オレンジ色のリボンが巻かれた箱だった。その傍にはひとつの封筒が添えられるようにしてあった。

少女はふらふらと近寄り、封筒を開けて中に入っていた手紙を読んだ。

それは、青年から少女へと向けた手紙だった。

遺書などというものではなくて、ただ少女と過ごした日々について綴られていた。

どうしてこんなものを書いているのか、僕自身も不思議に思っ

ているよ。
　でも、手紙という形で思い出を君へと残していくのもいいかもしれないと思ったから。
　どこか遠くに僕がいってしまっても、記憶と一緒にこの手紙は残るだろう？
　本当は言葉で伝えられるのが一番いいんだけど、それができないから。

　僕が君と出会ったことは、僕の人生の中で唯一の幸運かもしれない。
　君を拾ったのは偶然だったけれど、後悔なんてひとかけらもない。
　誰もが僕を疎むのに、君は受け入れてくれたんだから。
　僕はひとりで、君もひとりだったから……似たものどうしなのかもしれないね。

　君がこの手紙を読んでいるとき、僕はどうしているだろうか。
　もしかしたら違う場所にいるかもしれないし、まだ一緒に暮らしているかもしれない。
　でも、今の僕が言えるのは、どこにいても君の事はずっと忘れないだろう。
　だから君も僕のことを覚えていてほしい。声のだせない、不器用な奴がいたってね。
　いつもずっとじゃなくてもいい。ときどき、思い出して懐かしんでくれたならそれだけで。
　きっと手を伸ばしたかいがあったんだよ。

　いつまでも書いていてもきりがないから、そろそろ終わらせるね。
　ああ、そうだ。たぶんこの手紙の横に、箱が置いてあると思うのだけれど。
　僕から君への、最初で最後になるだろうプレゼントだよ。

君は覚えているかい？　もうじき、僕達が出会ってから一年になるんだよ。あっという間だったね。
君はあの時寒そうにしていたから……ひとりでも、寒くないように。
それじゃあ、またいつかどこかで。
（もし何でもないときにこれを読んでしまったなら、そっと戻しておいてほしい）

何枚もある手紙を読み終わるころには、少女の視界はかすんでいた。
手紙の文字も、所々にじんで読みづらくなってしまった。
便箋をしっかりと封筒の中にしまってから、箱を包んでいるリボンを解いた。
震える指で、そっと箱を開けると。
「これ……」
箱の中に入っていたのは、手袋とマフラー。どちらも、淡い陽だまりのような色をしている。
『ひとりでも、寒くないように』
先ほど手紙に書かれていた言葉が、頭の中を巡って……胸がつまって息ができなくなる。
一人きりの部屋の中、大切な物を抱きしめたまま少女は泣いた。
手袋やマフラーで身体が暖かくても、心に思い出が残っていたとしても。
わたし一人じゃ意味がないのに。彼がいなくちゃ意味がないのに。
どんなに泣いても叫んでも取り乱しても、彼に二度と会うことはできない。

出会わなければよかったとは思わないけれど……

「やっぱり――一人は寒いよ」

少女が呟いた言葉に答える言の葉はあらず。

冷え切った部屋の中、静かに木霊して消えていった。

涙零れた冬の日（後書き）

冬は綺麗ですけど、少し物悲しいです。あと……寒い。

旅立ちの春の日

あの後、医者を呼んで調べてもらったのだけれど。
彼がなくなったのは風邪をこじらせてしまったのが原因らしい。
買い物になんか行ったりしないで、家でゆっくりしていれば……とか。
色々後悔することはあるのだけれど。今となってはもう遅くて。
わたしが何をしても、彼はいずれ死んでしまったのかもしれない。
あの夜は、そう思い込むのが精一杯だった。ただ、逃げているだけでしかないのに。
その後、ひっそりとお葬式などを行ってわかったことがあった。
わたしは彼がそれなりにお金を持っていることが前から不思議だったのだけれど。
彼の元家族が仕送りをしていたらしい。
そこそこに裕福な家で、それなりの評判もあったという。
彼は、そこの家の長男……跡継ぎとして生まれたのだという。
けれど、病気のせいで言葉を話せなくなってしまったから……切り捨てた。
家の足手まといになる彼を、仕送りを条件として縁を切ったらしい。
それを聞いてわたしは思った。本当に彼も独りだったのだと。
すべて終わってからしばらくは、何もやる気が起きなかった。
一日中ぼうっとして、食事を取ることすら忘れてしまうこともあった。
何回か、商店街の人が様子を見に来てくれて発見されたこともあった。
家族には疎まれていたのかもしれないけれど、あの商店街の中で

も彼に普通に接してくれる人もいたらしい。
それからは、ちゃんと食事も忘れずにとるようになった。
そして時折、商店街などに手伝いをしにわたしは行くようになった。
お葬式の頃からそういう話はあったのだけれど、その時は断っていたから。
一人になってしまったのだから、お金だってどうにかしなきゃいけない。
部屋の中にひきこもっていたって、何もいいことはないし、死んでいるようで嫌だった。
そんな生活を繰り返しているうちに季節は巡り、春がやってきた。

薄く色づいた花びらが舞う、桜並木。
前に、あの人と来てお花見をして楽しんだ場所。二人で一緒に来た場所に、わたしは今は一人で来ている。
春風にあおられてひるがえりそうになるスカートを、手にもつ旅行カバンで抑えた。
一本の桜の木の下へとわたしは近寄る。
暮らしていた家をでて、どこか違うところに行こうと考えていた。
ほんの少し懐かしんで、別れを告げるためにこの場所へとやってきた。一番最初の思い出だから。
今だって、まだ考えている。ずっとあの家にいて、彼と暮らしたかったって。
でも、それじゃあ駄目なのだと気づいた。
過去に浸っていればいつまででも楽しいし、変わることはない。
でも……ただそれだけ。
ずっと同じ事を繰り返しているだけでは、生きている意味がない。
わたしが彼と出会って、少し変わったように、常に変わっていく

のが人間だと思うもの。
　同じ所にとどまり続けているなんて、わたしがわたしを許せないから。
　泣いているのなんて、きっと彼は望んでいないわ。
　お世話をしてくれた人のおかげもあって、旅行にでるくらいのお金もたまった。
　わたしは、一人で旅に出る。
　わたしみたいな子供がどこかへ行ったって、できることはほとんどない。
　それでも、何が起こるかはわからないから……わたしは旅立つの。
　ただ生きていくためだけじゃなく、誰かの為に。ただの自己満足で、偽善なのかもしれないけれど。
　あの雪の日、彼とわたしが出会ったように。ふとした一瞬に、誰かと交差することがあるというなら。
　彼がわたしに手を差し伸べてくれたように、誰かに触れられるというのなら。
　わたしは、まだ見ぬ誰かへと手を差し伸べてあげたい。
　たとえ何度も空を掴んだとしても、誰にも伝わることがなかったとしても。
　たった一人、わたしの手を取ってくれる人がいるならば――それだけでいい。
　いつか誰かが触れてくれるなら、伸ばした手も決して無駄ではないと思うことができるから。
『ありがとう』
　言葉には出さずに、胸の中でだけそっとわたしは呟く。今はいない、大切なあの人へ届くように。
　ありがとう。わたしに手を差し伸べてくれて。
　あなたと出会えたことは、わたしの一生の思い出で、宝物。
　忘れないで、思い出を抱きしめたままわたしは行くから。
　綺麗な花びらが舞う空をわたしは見上げる。眩しく照らしている

のは、明るく輝く太陽。
ほんの少しだけ……懐かしい笑顔を思い出して泣きそうになったけれど。
太陽の向こう、果てしなく広がる空へと——わたしは手を伸ばした。

旅立ちの春の日（後書き）

はい、お読みくださった方、ありがとうございます。
これにて、このお話は完結となります。ちょうどいい日付です（笑）

ぐだぐだと同じようなことばかり書いてしまいそうなので、さっぱりと終わらせてみました。（なってるのかは不明です）
またちまちまと短編などを書いていきたいと思います。

それでは、よいお年を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5432i/

手を伸ばしたのなら～connected　heart

2010年10月8日15時57分発行